



↑四万十川沿いの桜並木



↑植樹を行う土居武夫さん(中央)と関係者

■ 走るたび 四万十川桜マラソン ■

今年も桜の季節がやってきた。この時期の高知県民の関心の種は、高知城にある標準木が全国一早い開花をしてくれるかどうかだ。

その一方で、四万十川流域、特に四万十町の住民たちは、桜が四万十川桜マラソンのタイミングと合うかどうかを気にかける。2009年にはじまったこの大会は、昨年10回目の記念大会を迎えた。当初800名ほどだった参加者も、今では倍の1600名がエントリーする大会に成長した。桜舞う四万十川を眺めつつ走れ、沈下橋もコースに入るこの大会は、地元住民たちの温かいおもてなしもあってファンが多い。

■ 合併を機に

四万十川桜マラソンは、平成の大合併で「四万十町」が誕生したことを機に始まった。幡多郡十和村、大正町と高岡郡窪川町という3つの町村が四万十町になったものの、郡をまたいでの合併ということもあって

町としての一体感は今ひとつだった。言葉も幡多弁と土佐弁で微妙に違い、文化圏的にも十和・大正は伊予の影響が色濃いが、窪川は土佐文化圏。そこで3つの旧町村が一緒になってできることを考えたのが、窪川からスタートし大正を通して十和でゴールするマラソンだった。

このマラソン大会を企画し、ここまで牽引してきた武田秀義さん(桜マラソン実行委員会前会長)に、「桜マラソン」命名の由来を聞いてみた。武田さんはこう語る。「いや、特に理由はなくて、たまたま桜の時期だったのと、時を同じくして宿毛で菜の花の中を走る『花遍路マラソン』というのが始まるというのでなんとなく対抗意識で……。」ドラマチックな展開を期待したが、聞いた事実は事実としてここに記しておく。

■ 四万十川沿いに40010本の桜を

江戸は隅田川の堤防、いわゆる墨堤の桜並木が八代将軍吉宗公の命により植えられたことは有名だが、四万

十川沿いに40010本の桜並木をつくることに執念を燃やした人がいた。四万十川東部漁業協同組合の組合長で、四万十川漁業協同組合連合会の会長も長く務めた土居武夫さんその人である。私たち四万十川財団も、発足当初から理事をしていただき大変お世話になった。上記桜マラソンの第1回総会に出席した土居さんは、四万十川東部漁協が40010本の桜を植えることを目標に活動を続けていることと、その桜がテングス病に罹るなどしており手入れが必要なことを述べ、大会関係者にも協力を求めたという(武田氏談)。土居さんは四万十川財団の理事会でも、四万十川沿いに桜を植えられる所がなくなり困っていること、どこか植えられるスペースがあれば知らせてほしいと訴えたこともあった。

平成15年に始まった四万十川東部漁協主催の植樹会は、平成23年までの10年で1900本の桜を植えた。2009年3月に行われた8回目の植樹を四万十川財団ブログでもと

